

法人化問題を間近に控え、大学共同利用機関が、我が国の学術研究体制で果たすべき役割はますます重くなっている。研究所としての自律性を保持しつつ、今後の分野を超えた学術研究の連携体制を構築することが今問われている重要な課題である。

平成12年度に発足した統合バイオサイエンスセンターの新しい研究棟がE地区の新しいキャンパスに完成し、3研究所の研究協力がいよいよ実施段階となった。また、この1-2年の間に、E地区に本年度から発足する分子スケールナノサイエンスセンターの研究棟、関連科学研究系および錯体化学実験施設の研究棟の建築が予定され、統合バイオサイエンスセンターと協力しつつ、原子レベルから生命体までの新しい物質観を創製する場ができあがりつつある。極端紫外光実験施設の高度化計画が今年度実施され、分子科学専用の放射光として益々共同利用研究の成果が期待される。

例年のことではあるが、本年度も多くの方々が分子科学研究所から転出され、同時に多くの方々を分子科学研究所に迎えた。相関領域研究系の渡辺芳人教授は名古屋大学理学研究科物質理学専攻の教授として転出された。極端紫外光実験施設の鎌田雅夫助教授は佐賀大学理工学部教授として転出され、新しい放射光施設建設の指揮をとられている。極端紫外光科学研究系の田原太平助教授は一年の併任の後、理化学研究所の主任研究員として転任された。相関領域研究系分子クラスター研究部門の笠井俊夫教授および高須昌子助教授は2年間の流動部門での研究生活を終え、大阪大学および金沢大学へ復帰された。両先生の分子科学研究所への多大な貢献を篤く感謝する。共通研究施設である計算科学研究センターの青柳睦助教授は九州大学情報基盤センター教授として転出されたが、引き続き分子科学研究所の理論研究系の教授を併任され、本研究所の理論化学の推進に御尽力いただく。分子構造研究系分子動力学研究部門の併任をされていた北川禎三教授は統合バイオサイエンスセンター教授としてE地区の新棟に研究室が移転し、統合バイオサイエンスセンターでの研究協力体制の要として活躍されることになり、分子動力学研究部門の後任として東京大学から横山利彦教授が転任された。計算科学研究センターは東京工業大学から岡崎進教授を、極端紫外光実験施設には神戸大学から木村真一助教授を迎えた。また、分子クラスター研究部門には広島大学から谷本能文教授、静岡大学から石田俊正助教授らが流動部門教官として着任され、これからの2年間の充実した研究が期待されている。

平成13年度日本化学会賞を北川禎三教授が、同進歩賞を理論研究系の佐藤啓文助手が受賞された。両氏の今後のますますの学問的発展を期待し、お祝いの言葉に代えさせていただきたい。

平成14年5月

茅 幸 二

